

全自者協ニュース

・全自者協ニュース/第2号/1992年(平成4年)6月8日
 ・発行所=全国自閉症者施設連絡協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595
 ・発行人=石丸晃子 ・編集人=川相智史

第五回大会

いすみ学園

全国自閉症者施設連絡協議会の第五回大会が昨年の十月二十四、二十五日の両日、千葉県国民年金保養センター『そとぼう』で開催された。「生きがい求めて」をメインテーマに、大会史上最大規模の全国から三十一施設百三十名の参加を得て、開会式、総会、施設見学、懇親交流会、さらに翌日の分科会討議というプログラムが主管施設『いすみ学園』の進行ですめられた。

開会式では石丸会長より全自者協の直面している情勢と課題、および雲仙普賢岳災害で苦境に立つ障害者への支援依頼が紹介され、ついで厚生省障害福祉課長のメッセージ、地元夷隅町長らの来賓祝辞が寄せられた。

引き続き総会(委員会)では、昨年度事業報告、決算の報告・承認と次のような平成三年度事業計画・予算が確認された。

- ① 行政諸機関との情報交換、陳情活動
- ② 会員名簿の発行
- ③ 会報の発行

④ 施設実態調査の実施

⑤ 関係機関との連携

この後、各グループに分かれた『いすみ学園』の案内と説明をうけたあと、前年度施設実態調査の報告会では「自閉症者は高IQ・SQ群といえども社会参加に向けて克服していかなければならない行動障害を有する」という興味あるデータが示された。

ゆかた談義と銘打った夜の懇親交流会では、『いすみ学園』園生・職員歓迎コーラスやカラオケで盛り上がり、終了後も夜の更けるまであちらこちらで話が続いた。翌朝九時からは四分科会に分かれて、次のテーマで発表、討議が行われた。

・第一分科会

「今、自閉症者施設に期待されているもの―生きがいのある施設をめざして」

・第二分科会

「配慮を必要とする行動の分析とその対応―強度行動障害の事例を中心として」

・第三分科会

「働くことを通じて社会に生きる―園内作業、職場実習及びグループホームの実践の中から」

・第四分科会

「豊かなくらしを求めて―日常生活と余暇を楽しむすこすため」

以上の流れで大会日程は盛況のうちを終了したが、次回第六回大会は富山県の『めひの野園うさか寮』で平成四年九月十七・十八日に開催されることが確認、了承された。

第六回大会要項

テーマ 個性を育てる
 日時 平成四年九月十七・十八日

会場 主管施設

うさか寮

富山県富山市西金屋字高山六八二番地

☎〇七六四(36)〇二七〇

全体会・分科会会場・宿泊 富山観光ホテル

富山市吾羽町七五三八番地

☎〇七六四(31)五五五一

費用 宿泊費 一人

一万二千元

会員施設参加費 一人

二千元

非会員施設参加費 一人

三千元

海外事情

ノーマライゼーションに
生きる自閉症の人たち

日の出太陽の家 藤間英之

昨年の四月から七月にかけて清水基金の第九回海外研修生の一員として、カナダ、アメリカ、ドイツ、スウェーデンのノーマライゼーションの進展状況と、その時代を生きる自閉症の人たちの状況を知る機会を得たので、本紙をかりて報告したい。詳しくは清水基金から刊行されている報告書の拙文を参照していただきたい。

ノーマライゼーションの進展状況であるが、国によって千差万別であり、また国内でも地方によって様々である。したがってここで報告するのは、実際に私が観てきたアメリカのノースカロライナ州、ニューヨーク州、ネブラスカ州、スウェーデンのストックホルム県北西部地区の状況であることをあらかじめお断りしておく。私の研修先だけでは「欧州では…」など

と一般化して語ることはできないからである。

精神遅滞関係でノーマライゼーションの先端をいくのは、やはりストックホルム北西部とニューヨーク州であった。ストックホルムでは八百人規模の施設を閉鎖し、ニューヨーク州では五千人の施設を閉鎖しつつあるところであった。すでにこの二つの地域では、地域の中に住むということは障害の程度の問題ではなくなっている。生命維持装置をつけた子どもたち四人が住むグループホームがすでにネブラスカ州に存在し、ストックホルムでも準備中であった。人員配置などの物理的援助によってノーマライズできるのであれば、させてしまおうという姿勢である。それに対して、この流れから取り残され、また、これからの課題となっているのが、精神障害の要素を持っているのが、精神障害者を持つた人々のノーマライゼーションであった。ストックホルムではスペシャルホスピタルに収容されていた人々たちを受け入れるための「施設」なグループホームを施行的に始めており、近々、スペシャルホスピタルを閉鎖するという。ニューヨーク州では八百一千人の人々がまだ大規模施設内に収容されてお

り、人々を受け入れる十五人居住のグループホームを二年前に開設している。ネブラスカ大学のメノラシーノ博士は「ノーマライゼーションの恩恵を最後に受ける人々と、精神遅滞と精神障害を合わせ持った人々のためのクリニックを開設しており、この分野における医療との連携の重要性を改めて認識させられた。自閉症の人々の社会生活援助体制としては一番確立されていたのがTEACHHプログラムであった。

シヨプラー博士は「施設か地域か」ではなく「施設も地域も」であると語っていた。行動障害の重い人々たちのための「施設」なグループホーム、カロライナ・リビング・アンド・ラーニングセンターからスタッフが一日に二時間だけ指導をし、他の時間は自分たちだけで過ごすサポーターティブアパートメントまでその行動上の障害に応じて細かく体制を組んでいる。「施設」なグループホーム、「施設」でないグループホーム（両者の違いはデイプログラムのそのグループホーム内であるか、デイケアセンターに通うかの違いである）、スーパーバイズドアパートメント（日本の生活寮と同

じ、ただしスタッフは多い）、サポーターティブアパートメントとなっている。

また、就労の問題ではサポーターティブプロイメントの制度があり、この制度ではジョブコーチを雇用して、大学のカフェテリアやハンバーガーショップ、ピザショップなどで働いており、雇用側も名誉なことと考える精神風土をうらやましく感じた。

ドイツで知恵遅れの子どもを持つ親が同期の研修生に、ナチスによる知恵遅れの人たちのガス室送りる例にとって、「この国におけるノーマライゼーションはその民族文化に対する戦いなのです。」と語っている。

文化を変え、あるいは創造していくものとしての「ノーマライゼーション」はあると確信するしだいである。

最後に、先のサポーターティブプロイメントについては、先日、朝日新聞でも報せられたところであるが、TEACHHのグリーンビル地方事務所の中でプロモーションビデオを手に入れることができた。ご希望の方は連絡ください。

提言

自閉症者施設の役割

うさか寮 中田 勉

自閉症者の社会的予後は不良であり、とうてい労働商品にはなり得ない。ましてや、集団での施設処遇など考えられないと批判されつつ、十年前に施設を開設した。

開設当初の入所者は、激しいパニック、著しい行動異常、多動といった状態で手の施しようがなく、いずれの人たちも家庭、学校、地域社会から締め出されての施設利用である。

そうした人たちのなかから十九名が現在福祉ホームやグループホームで生活し、企業等に就労し、社会参加を果たしている。

こうした状況を彼らを通して経緯と実践の軌跡をたどり、施設の役割を考えてみたい。

仕事への取組

当初は「一定の場所に一定時間いることができる。」を目標にし、エネルギーのコントロールも兼ね、午前中には山歩きやマラソンを取り入れ、午後からは、手先の訓練

として、陶芸、藤細工、木工等、十種類の仕事を留意し、彼らに選択肢をもたせ取り組んだ。この時点では、「指示は一切しない」「いつかは何かができるだろう」と、「芽生え」を待った。

一年、二年と時間の経過のなかで「何かができる」芽生えが生まれ育ってきた。発達にばらつきがある彼らは所属を理解し、視覚をとおして仕事ができるようになってきた。

地域との交流

各々の仕事によって出来上がった作品をバザーや各種イベントに出展する機会を得て、評価され、更に質の高い作品が要求されるようになり、需要が増加し、意欲や競争力が育ってきた。作品をとおして人との交流の機会も増え、社会の仕組みをすこしづつ理解してきた。

そうした彼らのなかから地域で仕事ができることを目的に、地域特産の梨の選果場にパート勤務し、働くことと、報酬の意味を理解することができるようになった。

また一方、継続的に小グループによる合宿、登山、旅行等を行い、体験を積み重ね、人間関係や社会

性、強調性が育ってきた。

生きていてよかった

現在、通所者も含め百名の生活の拠点である当園では、「働く意欲を育てる」「日々の暮らしに役に立つ仕事をやる」「地域社会への参加」を目標に生活を楽しみ、いつかは何かができることを期待している。

私どもの考え方として、施設は、保護や隔離の場ではなく、障害除去の訓練の場であってもならないとし、自己完結のためのプログラムも組み込まず、一人ひとりの障害をその人の持ち味とし、これを受け入れ、社会資源を恐れることなく、ありのままに活用し、体験を通し適応行動や自己耐性ができるよう援助している。

現在就労している人たちも夫々の仕事場面で、その人にしかできない職人に育っている。

ノーマライゼーションやQOLの潮流の中で、生きていてよかったと思える人生を援助してあげることが、自閉症者施設の役割ではないだろうか。

実践

社会参加への取組

あさけ学園 奥野宏二

近年、障害者の「社会参加」という表現がよく使われる。私はその表現になんとなく抵抗をおぼえる。「完全参加と平等」をうたい文句とした国際障害者年以降、社会参加の名のもとに多くの取組がなされてきているが、本来そこにいるべきでない人がお客様として加わるというニュアンスを感じてしまう。

人間として存在するかぎり、本来的にその人が生活する社会や文化から逃れることはできず、社会的な存在として多くの人達との関係の中からその社会の文化を享受して生きることが普通の姿であろうと思う。

あさけ学園では設立の当初から、地域の一住人として日常的に地域にでかけ、その地域の社会的資源やサービスを普通に活用して生きることが理念としてきた。

具体的には次のような取組みを行ってきた。

①地域自治会とのかかわり

自治会に入会し、役員会や大掃除への参加のほか運動会、成人式、もちつき等を自治会と合同企画実施。

②施設設備の開放

自治会や子供会への会議室の開放、キャンプ用品等の貸し出し。

③地域行事への積極的参加

地域や町への行事へ積極的に参加。町体育協会に入会。草競馬、駅伝、盆踊り等。

④仕事はできるだけ地域で

施設の外に作業場を設けるとか、一般企業で働くことを重視。

⑤日常的生活

買い物、外出あるいは通院、帰省等を個人や小グループで行う。⑥年齢に応じた大人としての楽しみ方

コンサート、スキー、旅行、クルージング等この年齢の人たちの生活の楽しみ方を二十名単位あるいは小グループで実施。

以上の他に早い時期から個別の自活訓練を試み、就労家庭復帰やグループホーム、アパートなど地域で住む取組を行ってきた。

基本的には施設などで障害者に関わる我々の取組みは、「社会から障害者をまもる」「障害者から社会をまもる」等の歪んだ発想に

陥ることなく、本来的に社会の中で生きるべき人として、その生き難さを生きやすくするために、広い意味での本人の発達援助をするか、物理的・人的な援助システムを作りあげることであろうと思う。

実践

社会参加の実践について

東やまた工房

中村公昭

東やまた工房では、利用者個々の地域生活の実現を目標として、それを前提に今何が必要であるかを、一人ひとりについて明確にし、具体的な援助を提供していきたいと考えています。発想としては「障害を抱えたままで社会へ出ていく」ということです。課題の設定の際には「出来ないこと」よりも「スキルとして十分に確立していないこと」に注目しています。

こうした考え方を具体化していくと個別化した処遇が必要となります。実際の地域生活に必要な様々なスキルや援助は個々によって異なります。したがって、環境や地域資源の調査、現在の本人の能力

や周囲の状況を評価することが必要であり、それなしに彼らの療育は有り得ないと考えています。

具体的な援助の場面はいくつかありますが、今回は地域における余暇活動を通じての社会参加の実践例を簡単に報告させていただきます。

現在、二十一才の自閉症の男性Kさんは、重度の精神遅滞(自閉症)の判定を受けています。家族は母、祖母、本人で、母親が働いているという状況と、本人の持ちかなり強度なこだわり行動や余暇スキルの貧しさが、生活のリズムを乱す原因となっています。私たちはKさんの生活を形造っていく一つの方法として、休日の余暇スキルの拡充にスポットを当てることにしました。

Kさんについてはこれまでに、手先が器用であり、こだわりが良い意味で作用し、正確に作ることができること、そのような活動が好きなことなどの評価があり、また、判定の低さとは裏腹に、金銭や交通機関の利用に関するスキル等は持っていることも解っていました。

これらを踏まえて地域の調査を行い、毎月地区センターで行われ

ている男性中心の料理サークルへの参加というプログラムを提供するに至りました。結果としてこだわり行動の減少につながり、生活の場所を広げると共に、質の向上にもいくらか貢献できたと考えています。また、Kさんの参加は地域への障害者理解に対する啓蒙的な活動としての意味ある実践と考えています。

実践

働くことを通しての

社会参加

初雁の家 佐々木敏宏

初雁の家における作業の基本方針は大きく二つに分けることができます。①自閉症者を主な対象とする当施設としては治療教育的観点による問題行動の改善のみを目的としてプログラム化せず、毎日の仕事を通して求められる行動の形成を目的とする。②施設としての生活の場、作業の場に自己完結することなく、様々な選択肢を模索し、施設の外に積極的に活動の場を求める。このような方針のもと、開所以来初雁の家では一貫して施設の外での作業を行ってきた

した。日中、施設の中には誰もいない時もありました。地域における事業所に働きにくいわけですから、当然そこで働く地域の人々と接触することになります。例えば小さなことですが、手を洗うことひとつとっても、寮生が手を拭いた後のタオルが真黒になる。パニックを起こした寮生への対応がまずいと、事業所の方々に指摘される。このような事を通して、寮生、職員共に社会に積極的に出て行くことで多くを学んできました。

こうして大きな流れを作り、徐々に個別化への進めてきました。その過程の中でそれまで対応しきれなかった部分を見直すために施設内作業を始め、現在では次のような構成で働くことを通して社会参加を進めています。

外作業班は、車で四〇分程の所にある工場へ出かけ、そこで働く人々と同じ時間帯で作業をしております。(エアガン使用によるパレット製造)解体班では市内の専門業者と提携し、リサイクル事業を通して重度障害者の作業に前向きに取り組んでいます。陶芸班は毎月七店に納品し、製パン班は六月より移動販売車を導入する予定です。製パン、陶芸ともに地域に店

をもつことを目標に努力しています。

これらの実践の一つの形として、福祉ホームが一昨年に開所し、この四月には「やまびこ製作所」が収益事業となり、積極的に社会参加をすすめております。初雁の家においても、グループホームの間施設として自立小舎を開始し、日中の活動の場とともに生活の場の方向性を模索しています。

動向に想う

自閉症の社会参加

日本社会事業大学教授

石井 哲 夫

自閉症者の社会参加をめぐる、その現実からの逸脱性(非常識性)が障害となり、療育指導面の改善が進まないままに社会参加と焦って失敗するケースが後を絶たない。その対策を考えてみたい。

基本的には自閉症児者は、人に関わる対処法、すなわち自我の形成に問題を有する場合が多い。その為社会や家族からの孤立を深め、問題行動を強くし、その果てに、自分は勿論のこと周囲の人々の生

活水準さえも低下させる程に、混乱した生活が定着してしまうことが多かった。

つまり、従来精神薄弱者の処遇において認められてきたような在宅処遇によって人間として生きていく上で必要なスキルとしての自我形成が自閉症者において容易になされずとは思えない。好ましい人間関係を構築するという視点に立てば、まさに自閉症児者にとっては、自我のハビリテーションが必要となるわけで、個別療育としての関わりによって確固たる生活療育がおこなわれることが求められているのである。

特に従来から知的に高い自閉症者の社会参加について当然容易に出来るという考え方があったようであるが、実際の状況が分かってくるにつれ、そのようなものでないということが明らかになってきている。

自閉症と診断された子供の中で知的な発達が進む子どもがいる。この様な子どもは知的な発達の状況は個別的なちがいがあっても成人として社会との接触する機会に非常識な行動となって社会的な不適応を見せるようになってくる。私が運営している袖ヶ浦ひかり

の学園において社会参加を試みているケースの状況を紹介してその問題点をあげてみたい。

M・I・ケース

幼少期から丁寧によく考えて受け入れてくれた父母によって育てられてきた。そのころから預かり、直接的な指導を担当した。過敏で用心深く、こだわりが強く、この傾向は今日においても変わっていない。しかし人間関係におけるコミュニケーションは、その父母とのきめの細かい濃密な接触によってか、人との話がよくできるし理解力も優れている。しかし自閉症特有の現実感覚が弱く、自己経験からのイメージや欲求についてこだわりがあり、この処で人との会話がM・I・中心となって常軌を逸してしまう。旅館に勤めたが地域のパートの仲間から拒否されてしまう。このような挫折を経験する度に、「自閉症という自分を呪い」早く父母の許に行きたいという。慰めることに一苦労する。

Y・N・ケース

幼少期よりかなり厳しいしつけを受けるが、ある教育相談所で相談員から長期にわたるケアを受け、掃除会社の社員となって働く。しかしその会社では、すぐに社長や

部長と話をしたがったり、空想的な語り掛けをたくさんするので同僚から拒否され会社をやめる。袖ヶ浦のグループホームに入り、袖ヶ浦ひかりの学園の雑用を手伝う。学園の人達に対して空想的な語り掛けも多いし、演じてもいる。学園以外の就職を勧めてみても頑として断る。

M・S・ケース

有名大学を卒業して一流会社に就職するも、女子職員への態度挙動から、嘱託医に診察を要求されて、「精神分裂病」という診断を受け、服薬を勧められる。幼児期に指導した関係から母親に相談され、自閉症の専門医に再診を要請し、「精神分裂病」の診断を撤回して貰う。しかし会社は首になる。本人は、自分の人間関係の未熟なことに気が付き、全てを自分のせいにして悩む。

以上のような状況であれば自閉症者が社会参加しにくいことも良く分かるであろう。全自者協加盟の精神薄弱者更生施設において自閉症者の社会参加については、苦勞が多いと思うので、これからはその苦勞話を集めたいと思っ

学園紹介

第二ともえ学園

原田征一郎

社会福祉法人ともえ会は、昭和四十八年に認可され翌年昭和四十九年、重症心身障害児施設「子鹿学園」(四十床)を開園しました。更に、昭和五十一年に四十床が増床され八十床となりました。昭和五十三年に精神薄弱児施設「ともえ学園」(四十床)の開園。そして昭和五十五年、民間施設では全国唯一の第一種自閉症施設として認可されました。入園児達は施設内に併設されました広島県立庄原養護学校三次河内分級に通学し、医療・福祉・教育のケアを受けられることができるようになりました。しかし養護学校の高等部を卒業しても、社会復帰はおろか家庭復帰もできにくい、彼らのための自閉症者専門施設である精神薄弱者更生施設「第二ともえ学園」(定員三十名)を昭和六十一年に開園しました。

その他、昭和五十五年に在宅の心身障害児・者のための療育相談センター「みよしアカデミー」の

開設、昭和六十年には特別養護老人ホーム「こじか荘」(定員五十名)を開園しています。以上経営母体である社会福祉法人ともえ会の概要を紹介させていただきます。

第二ともえ学園は広島県の東北部に位置する、人口四万人余りの町、三次市の郊外の自然の大変豊かな環境の中にあります。男子二十五名、女子五名の園生の平均年齢は平成四年五月一日現在で二十九・六才です。

日常生活と余暇

生活自立、社会参加を目指して様々な療育活動を行っていますが、とりわけそのなかでも作業療育が主体となっています。

作業療育の内容に尽きましては後ほど詳しく紹介させていただきます。まずその他の日常生活の様子についてお知らせします。一日の始まりは、六時三十分起床、布団あげ、洗面、更衣をすませて七時朝食、歯磨、検温、服薬、朝食片付け、八時〜九時迄の間に各々の居室をはじめ生活棟全体の清掃をすませ、月曜日〜金曜日迄は九時から毎日作業にかけます。土曜、日曜日の作業の休みの日

は、クラブ活動、レクリエーション、模擬売店の開店等の時間に充てています。

①クラブ活動の内容は、調理クラブ、手芸、工作、スポーツ、音楽の各クラブでそれぞれ自分の希望するクラブに入ります。

②レクリエーションは、ボーリング、外食会、魚釣り、プロ野球観戦、宿泊旅行、スキー、行楽(バスハイク)、クリスマスパーティー等、季節の行事を行っています。

③模擬売店は、毎週日曜日の午後に開店しています。目的は現金に対する正しい理解を学習し、買物時のマナー、ルールを身につけることでもあります。

④その他、テレビ鑑賞、カラオケ、将棋、ファミコン、ショッピング、各種ゲーム等で時間を費やしますが、趣味の拡大等を計り余暇時間の充実をすることがこれから先の課題だと思われれます。

作業療育

作業療育は県道をはさんだ学園の向かいの小高い丘に、学園の所有する四万三千坪の山林があります。そこに「希望の丘療育センター」と名付けた作業場を開設して活動の拠点としています。

作業内容は椎茸栽培、石鹸製造、委託受注、地域事業所での実習等を行っています。

①椎茸栽培では、幸いなことに学園の所有する山林に植や樫の木が豊富にありますので、その原木を切り倒し、植菌、管理、採取、販売、乾燥椎茸の製造まで一貫して行っています。多品種の栽培をしていますので年間を通して作業がおこなえます。

②石鹸製造作業は家庭で処理に困られている食用油の廃油を回収してきて、それを原料として無公害粉石鹸を製造しています。廃油の回収先からは大変喜ばれ、石鹸の需要もだんだん伸びています。

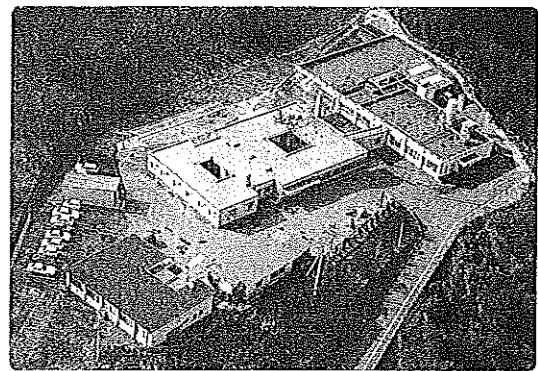
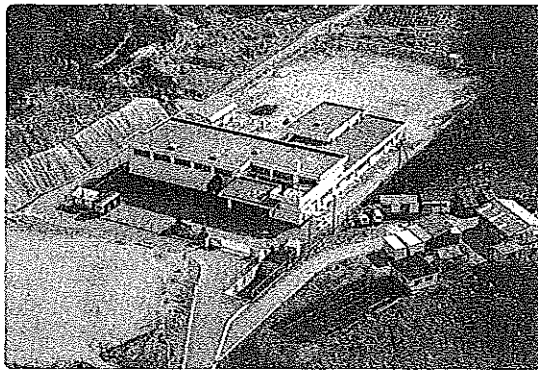
③委託受注は地域の事業所から委託された内職的な作業で、現在はジャージに使用するひらゴムを所定の長さに切って納品しています。

④地域事業所での実習には現在五ヶ所の事業所に園生が通動しています。スーパーマーケットの空箱の整理、電子部品の組立、菓子箱の組立、縫製工場、鉄工所での雑用等の仕事に従事しています。その他園芸、洗濯清掃作業等々々の園生の特性にあった作業を行っています。

社会参加

地域との関わりについては、学園の主催する各種行事に招待して参加を得たり、逆に地域の主催する秋祭り、文化祭の招待をうけて参加しています。また学園の発行する機関紙は全て周辺地域の人達に読んでいただき、福祉事業に対する理解を深めていただいています。

社会・家庭復帰についての取組みは、前述した一連の療育活動はもとより希望の丘に有する一戸建ての住宅(3DK)を利用して自活訓練を行っています。



「空き缶潰し」

南材ホームからお便りをいただいた。石丸会長の来訪の知らせとともに、次のような一節があった。「南材ホームの主作業になって、いる空き缶回収と潰しの仕事は、通所生たちが毎日地域を回って缶回収を行うことにより、地域住民の理解と協力の輪が広がっています。」

空き缶回収と潰しは他の多くの施設でも行われている。

星が丘寮では年間三〇万個潰すまでになったという。この実績が

かわれ、上磯町の公共施設から出る空き缶はすべて星が丘寮が処理することになったとのこと。しもふさ学園でも同様な事業が開始されると聞く。リサイクル、地球環境の重要性が叫ばれる現在、空き缶潰しもすてたもんじゃない。

情報コーナー

くさぶえの家での新事業

川崎市くさぶえの家では本年七月より川崎市内の療育困難な自閉症者を対象に、療育相談、園内指導、訪問指導を柱とする自閉症者短期訓練事業と、職場に定着できなかった自閉症者を一時的に受け入れ、再就労のために必要な指導・訓練を行う自閉症者社会自立促進事業を開始する。

三菱財団助成による
発達障害セミナー

主催 日本自閉症協会
共催 全国自閉症者施設連絡協議会
日時 平成四年七月七・八日
会場 全社協ホール

東京都千代田区霞ヶ関三一
三一二 新霞ヶ関ビル
日時 平成四年八月三・四・五日
会場 全社協ホール
東京都千代田区霞ヶ関三一
三一二 新霞ヶ関ビル

プログラム
シンポジウムI
「理解されにくい自閉症者たち」
司会/大野智也、佐々木正美

講演/須田初枝、調一興、戸屋隆、中根晃

まとも/石井哲夫、山崎晃資
シンポジウムII
「発達障害乳幼児の早期療育」
司会/太田昌孝

講演/清水康夫、奥村幸子
山崎晃資

指定討論/石井哲夫、栗田広
シンポジウムIII
「強度行動障害の理解と対応」
司会/石丸晃子

講演/三宅温子、大坪嘉典
飯田雅子

指定討論/中沢健、山崎晃資
まとも/石井哲夫
参加費 三千元

(ただし全自者協加盟施設
参加者は千円)

自閉症実践療育セミナー

主催 社会福祉法人 嬉泉

テーマ 自閉症児者との心の対話を求めて
プログラムI 治療者の問題を考
える

II 自閉症を考える
III 治療をめぐって
講師 石井哲夫、小川捷之 他
参加費 一万五千元

第2回自閉症児者のための
実践キャンプ

自閉症児者の生活行動の改善・
発達、および指導・訓練法の研究
開発のためのキャンプ。
主催 三気の里
日時 平成四年八月九〜十二日
会場 三気の里

熊本県菊池郡大津町森五四
一
一
定員 十五名
締切 六月十五日
申込 三気の里療育相談室
参加費 一万円

新会員施設

あいの家(定員40名)

設置母体・(社福)梅の里
所在地・茨城県茨城郡茨城町小
幡北山二七六一三六

TEL(〇二九二)九二・八二二八
FAX(〇二九二)九二・八二二八

理事長・横山和郎/施設長・岡本
享/本会連絡者・豊田順子

三気の里(定員50名)

設置母体・(社福)三気の会
所在地・熊本県菊池郡大津町大字
森字中ノ切五四番二

TEL(〇九六二)九三・八一〇〇
FAX(〇九六二)九三・八一〇一

理事長・田中稔/施設長・土井尚
典/本会連絡者・末永博美

初雁の家(定員50名)

設置母体・(社福)けやきの郷
所在地・川越市大字平塚新田字高
田町一六二番地

TEL(〇四九二)三三二・六三六三
FAX(〇四九二)三三二・六三六七

理事長・須田初枝/施設長・佐々
木敏宏/本会連絡者・佐々木敏宏

ひらきの里(定員30名)

設置母体・(社福)ひらきの里

所在地・山口市大字仁保中郷四三
番地
TEL(〇八三九)二九・〇三一二
FAX(〇八三九)二九・〇三五七

理事長・川谷孝夫/施設長・三隅
達雄/本会連絡者・三隅達雄

賛助会員
社台福祉園(定員40名)

設置母体・苫小牧希望の里
所在地・北海道白老郡白老町社台
三四三番地

TEL(〇一四四)八二・六一五〇
FAX(〇一四四)八二・六一五〇

理事長・斎藤浩一/施設長・斎藤
あい子/本会連絡者・板垣信行

樽前希望学園(定員40名)

設置母体・苫小牧希望の里
所在地・北海道苫小牧市樽前一五
九一四四九

TEL(〇一四四)六七・六二五〇
FAX(〇一四四)六七・六二四九

理事長・斎藤浩一/施設長・斎藤
浩一/本会連絡者・関上暁

編集後記

第2号は「社会参加」のテーマ
のもとに寄稿いただきました。
諸先生方には多忙にもかかわらず
ありがとうございます。

藤間先生には感謝いたします。